



田崎 悦子氏

ピアニスト

究める

日米をまたにかけ、半世紀に及ぶ演奏歴を誇る。二〇〇六年から足かけ四年がかりで半年に一度、六回連続のリサイタル「田崎悦子ピアノ大全集」に挑み、半周を終えた。今年五月二十三日、東京文化会館での第四夜は「世界各地でのデビューに弾いた思い出の曲」であるリストのソナタとショパンの作品を配し「ピアノの詩人達」と題した。

「一人の作曲家に集中する連続演奏会、例えばベートーベンの三十二あるソナタを全曲弾くのが話題を呼びがち。実際は私に愛された作品だけを厳選して時代別に並べる方

が華やかだし、面白い」と、マラソン・リサイタルの背景を語る。ピアニストも仕事だから時には「嫌な曲」も弾いた。だが今回は「たまたまなく好きな曲ばかりなので、生まれてこのかた一番楽しい時間を過ごしている」と喜ぶ。

さらなる高みや深み目指す

ピアノは一回ごと、神戸から一九二五年製のニューヨーク・スタインウエーを東京へ運ぶ。グレン・グールドがバッハ作品の録音に使ったとされる名器。以前は楽器にこだわらなかつたが、「私の表現したいことすべてに反応してくれる、と直感した意外で異常な出会いにより、考えが一変した。ちょうど好きな男性と一緒にいて、自分から今までの何倍も良いものが引き出されていく感じ」という。

戦後の音楽教育に大きな足跡を残した桐朋学園音楽部の前身、「子どものための音楽教室」で育った第一世代。齋藤秀雄ら「情熱にあふれた先生たちにガンガンたたき込まれた」基礎が米国留学で花開き、マイルボロ音楽祭でのルドルフ・ゼルキン、ミエチスラフ・ホルシヨフスキーらとの出会いにつながった。

「巨匠たちはみな、よく練習していた」との記憶は今、「年をとればとるほど枯れるのではなく、精神的にも肉体的にも脱力が行き届き、さらなる高みや深み、面白みを目指して弾き込む」との確信に変わった。リサイタルごとに「楽譜を買い替え、耳を研ぎ澄まし、心を整え、表現を磨き、本番では生きている証しを即興で伝える」ため、「とにかく弾き続ける」。

たざき・えつこ 一九四一年東京生まれ。井口秋子らに師事、六四年ジュリアード音楽院卒。七九年、ゲオルク・シオルティ指揮シカゴ交響楽団定期演奏会でバルトークの協奏曲を弾き、注目を集めた。